

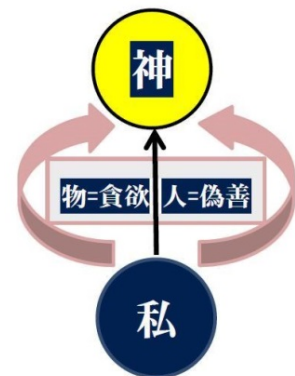
御国の民の歩み (1) 「天に宝をたくわえる」

【聖書箇所】 マタイの福音書 6章 19～24節

ベレーシート

●マタイの福音書 6章 1～18節まで、ユダヤ人たちが大切にしていた三つの宗教的善行が取り上げられていました。そこには「偽善者たち」という言葉が、それぞれの善行をしようとする者に対して出てきました(2, 5, 16節)。偽善とは神と自分との間に「人」が入ってくることです。「施し」「祈り」「断食」という最も敬虔な行ないにおいて、神を見ないで人を見る。そうしたことから、人間がいかに人からの毀誉褒貶(きよほうへん)によって動かされやすい者であるかを教えられます。他者からの評価が私たちの隠れた原動力になっているとするならば、神に対する敬虔な行為さえも偽善にすぎなくなるのです。人の前から隠れて善い行いを為すところに、その人が天の父の前で生きているかどうかが問われてくるのです。人から隠れて為すところに、「隠れた所で見ておられる天の父が、私たちに報いてくださるのだ」とイエシュアは教えています。

●6章 1～18節では、右の図に見るように、神と自分との間に「人」が入ってくることで偽善に陥ることが語られています。しかし、今回取り上げる 6章 19～24節の箇所では、神と自分との間に「物」が入ってくることで貪欲に陥ることを教えています。貪欲、物欲に陥ると、それに心が捕らえられて、神が見えなくなってしまう、やがては神により頼むことをしなくなってしまう危険をイエシュアは教えようとしています。したがって「神か」、それとも「富か」という究極的選択が私たちに迫られることになるのです。



●今回の聖書箇所には、「自分の宝は、天にたくわえること」、「からだのあかりは目であること」、「だれも二人の主人に仕えることはできないこと」。これら三つのことが別々の事柄ではなく、それぞれ密接なつながりをもっていることを、順を追ってお話したいと思います。

1. 自分の宝は、天にたくわえなさい

【新改訳改訂第3版】 マタイの福音書 6章 19～21節

19 自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、

また盗人が穴をあけて盗みます。

20 自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。

21 あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。

●あなたにとっての「宝」を見出すテスト

- ① 自分にとって最も大切だと思うもの、価値ありとするもの(価値)
- ② 決して失いたくないもの、それなしには生きていけないもの(依存の対象)
- ③ 最も心を傾けさせるもの、その人の心を支配しているもの(関心の的)
- ④ 自分の心に喜びと満足を与えてくれるもの(満足)

●人にとって「宝」とは、価値ありとするもの、依存の対象、関心の的、喜びと満足を与えてくれるものです。それらがその人にとっても宝ということができません。ちなみに、原文のギリシア語では当然ながら、「宝」は冠詞付の単数(「ホ・セーサウロス」ὁ θησαυρός)で表記されています。「宝」は必ずしも「お金」のことではありません。人はだれでも、例外なく、自分の有形無形の宝をもっているのです。例えば、家族、子ども、健康、安定した生活、自分の才能・能力・技能、仕事、所有物、などなど。

●イエシュアが「あなたの宝のあるところにあなたの心もある」(21 節)と言っているように、その「宝」がその人の心であり、その人の生きる楽しみと目的になっているのです。自分自身のために宝を持つこと、それ自体は決して悪い事だとはイエシュアは言っていません。むしろ、宝なしに人は生きられない存在です。自分の宝を見出そうとすることは、生きることの原動力となるからです。ただ重要なことは、その宝を「地上にたくわえること」を警告しているのです。なぜなら、「そこ(=地上)では虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗む」からだとあります。

●「虫」と訳されたギリシア語の「セース」(σης)は「蛾」のことで、また「さび」と訳された「ブローシス」(βρῶσις)は本来「食べ物」を意味します。「さび」と「食べ物」のイメージがすんなりと結びつきませんが、いずれにしても、それらが「宝」を「きず物」としてしまうことには変わりません。

●「きず物になる」と訳されたギリシア語は、宝を「台なしにする、醜くなる、見苦しくする、滅び去る、消えてゆく」という意味の動詞「アフアニゾー」(ἀφάνιζω)が使われています。どんなに宝が輝いているように見えても、やがてはこの地上では「きず物」となり、やがては見苦しい、醜いものになってしまうことを述べています。

●また宝は、盗人によって「盗まれる」ものだということをイエシュアは述べていますが、貴重なものであればあるほど、盗まれる危険性が益すことはこの世の常識です。今日のインターネットにおいて、不正なアクセスなどから守るセキュリティーについて、いつも目を光らせていないと、個人情報簡単にハッカーたちの餌食にされて盗まれてしまうのは日常茶飯事です。

●ユダの王ヒゼキヤが病気から回復したころ、バビロン王がヒゼキヤ王のところ到手紙と贈り物を届けるために使者たちを遣わしました。つまり彼らはヒゼキヤのお見舞いにやってきたのです。ヒゼキヤ王は嬉しさの余り、彼らを迎えて、彼らに宝物蔵にあるありとあらゆるものをみな見せてしまうという失態を犯しました。やがて宝物蔵にある宝のすべてがバビロンへ持ち運ばれることになるとは、預言者イザヤから

指摘されるまでは思いもよりませんでした。このように、地上の宝をいつどのようにして失ってしまうのかは、失われるまでだれにも分からないものなのです。決して失われない宝などはありません。ところが、いかなる天才的な盗人(ハッカー)であっても、決して盗めない場所があるのです。それは「天」です。しかも「天にたくわえられた宝」は盗まれないだけでなく、そこでは決してぎず物になりません。ですから、イエシュアは「自分の宝は、天にたくわえなさい」と語っているのです。「天に」(「バツシャーマイム」**בַּשָּׁמַיִם**)とは場所の意味ではなく、「神のご支配の中に」を意味しています。

2. からだのあかりは目です

- 「自分の宝は、天にたくわえる」ということを説明するために、イエシュアは「目」のことについて、以下のように語っています。目は「からだ」の一部ですが、からだに光を取り入れる窓口と言えます。聖書で「光」と言う場合、それは必ずしも光源としての「光」ではなく、目に見えない光、つまり、神のご計画やみこころ、御旨と目的を意味しています。そのように理解しないと、以下の箇所の意味が理解できないはず。聖書は、人間の存在を「心」ではなく、「からだ」(「パーサール」**בְּשָׂרָא**)として表現しています。したがって、聖書のいう「救い」は、「心」の救いではなく、「からだ」の救いなのです。ですから、からだの窓口(入口)となる目は健全でなければならないのです。イエシュアもからだには健全な目が不可欠であることを語っています。

- 「目」という語彙のヘブル語は「アイン」(**אֵין**)ですが、その初出箇所は創世記 3 章 5 節です(続く 6, 7 節にもこの語があります)。そこでは次のように記されています。

【新改訳改訂第3版】創世記 3 章 5~7 節

5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神ようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」

6 そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。

7 このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。

- エデンの園の中央にある「善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ」と主から言われていたにもかかわらず、狡猾な蛇は「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神ようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです」と誘惑しました。蛇は、神が人に造り与えた目があたかも欠陥があるかのような情報を与えました。「開かれなければならない目」とは不完全な目です。エデンに置かれた最初の人間の目が不完全であったのでしょうか。いいえ、そんなはずはありません。神によって、神とともに生きるように造られた人は、「それは非常に良かった」のです(創世記 1:31)。最初の人間は、神がその御手をもって造られた世界を、澄んだ目で、健全な目で理解していたはず。ところが、蛇にだまされて食べてはならないものを食べ

てしまった人間は、健全な目で神の「光」をからだに取り入れることができなくなってしまいました。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 6章 22～23節

22 からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目が健全なら、あなたの全身が明るいが、
23 もし、目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。それなら、もしあなたのうちの光が暗ければ、
その暗さはどんなでしょう。

●ここでイエシュアが言わんとしていることは、「天に宝をたくわえる」ためには、「目が健全で」、しかも「からだ全体が輝いていなければならない」ことを教えようとしています。とすれば、「目が健全である」とはどういうことなのでしょう。まずここで、いろいろな聖書の訳を見てみましょう。

〔 (新改訳) 「もしあなたの目が**健全なら**」
(口語訳) 「もしあなたの目が**澄んでいれば**」(柳生訳「そなたの目が**澄みきっていれば**」)
(新共同訳) 「もしあなたの目が**正しければ**」

●また、「目が健全であるなら、全身が明るい」とはどういうことでしょうか。そして、それが「天に宝をたくわえる」こととどのように関係しているのでしょうか。

●ちなみに、ヘブル語の目を意味する「アイン」(אֵין)という語彙を構成する三つの文字を見てみましょう。そこには、「目、見る」を意味する「アイン」(ע)、神の御手を意味する「ヨード」(י)、永遠の神の定めを意味する「ヌーン・ソフィート」(ן)の文字によって構成されています。つまり、**神の御手によってなされる神の定め(ご計画)を見る目**、それがヘブル語の「アイン」(אֵין)が示唆していることだと言えます。

この「目」こそ、「健全な目」と言えるのです。そしてこの「健全な目」によって、からだ全体を明るくすることができるのです。それは「からだの救い」、つまり「永遠に朽ちることのないからだ」を意味するのです。

●「健全な」「澄んだ」「正しい」と訳されたギリシア語の形容詞「ハポルース」(ἀπλούς)は、単純な(複雑ではない)、二心のない、純粹な、ひとつのものだけをひたすら見続けるという意味を持っています。これをヘブル語にすると「完全な」を意味する「ターム」(תָּמַם)、あるいは「ターミーム」(תְּמִימִים)となり、どのような「目」が光を取り込んで「からだを明るくする(輝かす)」のかが理解できます。その意味では、「私の目を開いてください。わたしが、あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めることができるようにしてください。」(詩篇 119:18)と祈る必要があります。

●前にも学んだように、「光」(「オール」אוֹר)とは光源としての「光」ではなく、神のご計画とみこころ、御旨と目的を表わす概念です。それによってからだ全体が神の知恵と栄光を輝かすようになるのです。とすれば、健全な(二心のない純粹な)目を通して、その「光」をからだに取り込まなくてはなりません。も

し、その目が悪く、不健全であるならば、からだ全体を明るくすることはできません。光を取り入れることができないからだは暗黒であり、かつ悲惨なものとなることをイエシュアは警告しています。

3. だれも二人の主人に仕えることはできない

●御国の民としての歩みは、健全な目をもって「光」を見続けるだけでなく、その光によって生きることです。しかもその「光」はキリストのうちにあります。そのことによって「御国の福音」にあずかることができ、**究極の救い(からだの完全なあがない)**を受けることができます。そのためには、神という主人に一途に仕えなければならないのです。そのことをイエシュアは以下のことばで表現しています。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 6章 24節

だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。

一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。

あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。

●上記の「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。」という部分と、「あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」という部分は同義的パラレリズムです。「ふたりの主人」とは、ここでは「神」と「富」です。その間に、「二人の主人に」仕えることのできない理由が述べられています。つまり、必ず、どちらか一方を愛し重んじるからだとしています。

●このことを説明する「ある農夫」の話があります。

ある日、ある農夫がニコニコと喜びながら帰って来ました。というのは、一番良い牛が2頭の子牛を産んだからでした。一頭は赤い牛、もう一頭は白い牛だったということ、彼は奥さんと家族に知らせました。彼はその時、急に、「時期が来たら一頭を売ってその売上金は家に、もう一頭の分は主の働きのためにささげよう」と言いました。すると奥さんが「どちらをささげるつもりなの?」と尋ねました。すると彼は「そんなことは今心配しなくてもよい。時期が来るまで両方とも同じように育てよう」と答えました。

それから数か月後、男はなんと哀れな悲しい顔つきをして家に帰って来ました。奥さんが「何か心配ごとでもあるの?」と聞くと、「悪い知らせがある。主にささげた牛が死んでしまった。」と答えました。奥さんは、「でも、あの時、どちらの牛を主にささげるのか、決めていなかったわ。」と言いましたが、彼は「いや、白いやつ(牛)にしようずっと決めていたんだ。そして白いやつが死んでしまった。主にささげようと思った牛が死んでしまったのだ。」と。

●この話を聞いて笑うかもしれませんが。しかし、これは私たち人間のことを言っている話なのです。つまり、死ぬのは、いつも主の牛なのだということです。残った牛を売って、その代金の半分を家に、あとの半分を主にささげれば良いのに、そう考えないところがこの話の言わんとするところ。何か困った問

題に直面した時、真っ先に削られるのが、主のものなのです。この話の場合は「牛」でしたが、それは時間、奉仕、献金とも言い換えることができます。神と自分との間に「物」(お金)が入ってくると、むさぼりが起こってしまい、イエシュアの言う「一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりする」ということが起こってしまい、その結果、「神にも仕え、また富にも仕える(原語は「仕え続ける」という意味)ということではできません。」ということになるのです。

●この「むさぼり(貪り)」こそが「偶像礼拝」なのです。使徒パウロは「むさぼる者——これが偶像礼拝者です、——こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。」(エペソ 5:5)と教えています。

●「富」(マモン)は、私たちが想像する以上にすさまじい力をもっています。その力はデーモン的(悪魔的)です。それは私たちが神から引き離してしまうすさまじい威力をもっているのです。「富」(マモン)は私たちに三つの影響を及ぼします。

①**富は、誤った独立心・全能感を助長します。**

富を得た者は、金さえあれば何でも手に入るし、なんでもお金で解決がつくと考えてしまいます。

②**富は、人をこの世の目に見えるものに縛りつけます。**

望むものがすべて世にあるものだと、来るべき世に何の興味を抱かなくなります。目に見えるものに心を奪われ、目に見えないものの価値を希薄にさせます。

③**富は人を利己主義にします。**

貪欲、物欲はどんなに多く持っても満たされません。一度、安楽さと贅沢さを味わうと、それを失うことを恐れ、失うまいといつも緊張状態に置かれ、心配が絶えなくなります。そして分かち合うよりも、いっそうそれに執着するようになってしまうのです。

●イエシュアが「金持ちが天の御国に入ることは、らくだが針の穴を通る以上に難しい」と言われましたが、それは富の持っているデーモン的な力が働いているからです。貪りの誘惑に自分の力で勝つことはできません。ポンと目の前に1万円置かれるなら、その誘惑に打ち勝つことができるかも知れません。しかし夢の宝くじが当たって、3億円がポンと目の前に置かれたら、その力には勝てないでしょう。神を求めることから離れて、身の破滅を招くこと間違いなしです。どうすれば、この力から逃れられるでしょう。富(マモン)に支配されることなく、神に仕え、天に宝をたくわえる御国の民として歩むことができるでしょうか。それは、先ほど述べたように、「健全な、澄んだ目」が不可欠です。つまり、神が世界の基の置かれる前から定められていた神のご計画とみこころを知り、その御旨と目的を一途に見ることです。キリストにおいて隠されていた神の栄光の知識である「神の恵みの福音」と「御国の福音」という永遠の「宝」を知り、それを求め続けること、それこそが「**天に宝をたくわえる**」ことです。「二兎を追う者は一兎をも得ず」ということわざがあるように、この「富」ではなく、私たちの唯一の主人であるイエシュアに仕えることを選び取るこそが、「**御国の民としてのふさわしい歩み**」なのです。

2017.9.17